
月の糸

香箱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の糸

【Nコード】

N0798Z

【作者名】

香箱

【あらすじ】

のぼってごらん。のぼってみよう。

カリカリとノートにペンを走らせていると、唐突に、左の目が落ちた。

俯いていたからだろうか？　そう考える内にも、白と黒の綺麗な球体はノートの上に着地すると、ころころと机を転がり、慌てて手を伸ばすも一足遅く、それは僕の脇をすり抜けて、机の下の暗がり消えていく。

急いで体を曲げて机の下を覗き込めば、逆さまの視界の隅に、意思を得たように跳ねていく僕の目が見えた。

取りに行かなくちゃ。

席を立とうとして顔を上げて、僕は初めて、そこが見慣れた大学の講義室だと気付く。

黒板の前では歴史？担当の教授が不明瞭な言葉を呪文のように並べ、整然と配置された机では、ついさっきまでの僕と同じ様に学生達が一心不乱にノートを引っ掻いている。

室内を満たす、生暖かく、弛緩した空気が気持ち悪い。

…でも、今はそんなことより僕の目だ。

片方だけの視線を室内にさ迷わせると、講義室の入口に連続する半円を描きながら跳ねていく小さな玉が目映った。

運悪く扉は微かに開いていて、眼球は最後に一際高く跳ねると、暗い隙間へと消えていく。

僕は席を立ち、抑揚なく歌う教授の声とヒステリックなノートの鳴き声を背に、足早に机の合間を歩くと、逃げ出した目を追って講義室の扉を開いた。

扉の向こう、暗い通路の奥を眼球は跳ね進んでいく。

ぼわん、たゆん、ぼよん、ぼよん。

僕が歩調を速めればその分速く、僕が歩調を緩めればその分ゆっくりと。距離を一定に保ったまま進む動きは、どこか僕をからかっているようにも思える。

歩く中で目に入るのはベージュ色の床と白の壁、所々に張られた賑やかで馬鹿らしい張り紙。黒のフィルターを通したそんな単調な眺めだけで、すれ違う窓の外を覗いても、そこには塗り潰されたような夜闇と弱々しい蛍光灯の灯りしか見えない。

片目の視界に慣れない僕は何度か転びそうになりながら眼球を追いかけていく。白黒柄のゴム毬は通路を跳ねていく。

幾つかの通路を過ぎて、幾つかの階段を登って、幾つかの角を曲がり、やがて弾む眼球は見慣れない小さな階段を登っていった。

記憶にないその階段に僕は少し不安を覚えたものの、それは進む足を止めるほどのものではなく、僕はそのまま見慣れぬ階段へと足を踏み入れる。

階段は何度か折り返しながら上へと続き、息が切れ始めた頃、それは開け放たれた扉から大学の屋上へと抜けた。

屋上は風もなく、ただ、しつとりと冷えた夜の空気が満ちていて、見回せば辺りには灯りの点る家々が影絵のように広がっている。

…そして、視線を目の前の地面に落として、僕は溜め息をついた。

そこには、落とした半熟卵のように無惨に潰れた僕の目があったからだ。

目だけであれだけ跳ね回ったんだ。残念だけど、無理もない。でも、眼窩から逃れて自由になった暫くの間、「これ」は満足だったろうか。

そんなことがふと少し気になって、足元の潰れた眼球をしゃがみ込んで覗いてみる。

けれど、広がった白目の中でまだゆっくりと動く黒目はクラゲみたいに漂うだけで、結局、僕には何も読み取ることは出来なかった。

暫くして僕は気持ちを切り替え、体を起こして講義室に戻ろうと振り返る。…そしてようやく、そこにある筈のないものがそびえ立つことに気付いた。

月明かりに濡れるそれは、巨大な送電塔だ。鈍色の塔はさも当たり前のように屋上にそびえているけど、大学に入学してから3年間、校舎の上にこんな送電塔見たこともない。…ゆっくりと歩み寄って眺めてみれば、送電塔と言ったけど、電線が繋がっている訳でもなく、どちらかと言えば電波塔に近いように思う。

鉄錆の匂いがしたし、がっしりとしたその足には月明かりでも見
てとれる程、風雨の跡が残されていて、それが昨日の今日で作られ
た物ではないと分かる。そして、塔の中央には鉄のしっかりした梯
子があつて、それは真つ直ぐ上へと続いている。どうやら一番上ま
で続いているようだ。

…そんな風に調べながら塔を見上げていると、ふと、身震いする
ようなこそばゆい気持ち湧いた。揺らめき燻るその感情が好奇心
だと気付くのにそう時間は掛からず。今度ははつきりと、

「上ってみたい」

そう思った。

夜空にそびえるそれが、不意に何だか退屈で窮屈な日常に開いた
穴のように見えたのだ。バカと煙はなんとやら、自分でも子供じみ
た想いだと思うけれど、感じたものは仕方ない。

風もないし、誰も見てはいない。気を付けて上れば大丈夫だ。

自分にそう言い聞かせると、僕は錆でざらついた手摺に手を伸ば
し、不思議な塔を上り始めた。

…一段一段気を付けて梯子を上っていく。記憶よりも体が重くて、
いつの間にか自分が大人になっていたことを実感として気付かされ
る。

上る内、何度か手が滑りそうになって冷や汗をかいたけど、取り
付かれたように次の手摺に手を伸ばして…気付けば僕は塔の中腹ま

で来ていた。屋上の地面は遠ざかって、辺りには少しずつ風が出てきている。

眼下には賑やかな星のように街の灯りが満ちて、渋滞した道路に並ぶリアランプがそれを縫う血管のように見えた。

高い場所は得意じゃないのに、何故だか怖くはなかった。夜の風が心地よくて、風景が綺麗で、梯子の行く先が気になって、もっと眺めてみたくて。

そんな他の要素だけが気になっていて、あと一步、あと一步と、僕はひたすらに梯子を上っていく。

：講義室では今も日常が続いているんだろうか。僕の片目は屋上から僕を見上げているだろうか。この塔はいつの間に建ったんだろうか。手すりを掴むリズムに乗って、ぼんやりとした考えが幾つか通り過ぎていく。

結局、そうして辿り着いた塔の頂上は、黄色いペンキの所々剥げ落ちた四角い鉄の枠で終わっていた。：けれど、そこは梯子の頂上ではなく、今度は梯子だけが月明かりの中、天から垂れる糸のように白い一本の線になって何処までも伸びている。

枠を抜けた場所から見渡せば、地上には都市の煌めきが満ちて、その向こうには溶けたタールを思わせる黒い海が湾曲する水平線に続き、見上げる空には透き通った青紫の暗幕と、そこに浮かぶ無数の星の瞬き、柔らかかいて力強い光を湛える満月がある。

：渦巻く風の中、僕は少し考えて、梯子をそのまま上ることにした。ここまで来たら、梯子の行く先を確かめずにはいられなかった

し、眼下のざわめきに戻りたい理由もそれほどなかったから。

不思議な身の軽さに任せて、深く考えることはせず、次の手摺に手を伸ばす。

どれくらい上り続けただろう。

強まる風の中を、上って。上って。上って。上って。

風は一段と強まって、気を抜けば飛ばされてしまいそうな程だから、僕は必死に梯子にしがみつき上っていく。

やがて、遠ざかる地上の灯りは、弱々しく朧気なものになっていき。それに反比例するように、夜空は生氣を取り戻し、爛々と輝き始めた。

月はいよいよ輝いて眩しい程だ。

気がつけば、強くなる一方だった風もいつの間にか和らいで、代わりに空気が一段と冷えてきた。

寒さに手摺を掴む手がかじかむ。流石に疲れも溜まってきたから、時々、抱き付くように腕で梯子を掴み、手を休ませながら上る。休んで、上って、休んで、上って。

…こんなに動いたのは何年振りだろう。

単調な作業の繰り返しだけど、それが何故だか妙に懐かしく、楽しかった。

辺りにはゆっくりとしたテンポで、僕の靴が交互に梯子を叩く音

だけが響く。

…途中、夜露に何度か手が滑りそうになり、ひやりとした感覚が脳天に突き抜ける。

けれど、それさえ一息突けばどこか心地いい緊張感をくれたし、手に浮かぶ豆の鈍い痛みも、それはそれで冒険のスパイスのように感じられた。

そうして、地上とも空ともつかない一筋の道を上り続ける内、段々と大きくなるそれを見て、僕はようやく気付いた。

梯子は、真っ直ぐに月へと向かっていたのだ。

月輪はいつの間にか、視界のかなりの部分を占めるようになっていて、見下ろせば、遠い地上はもうひとつの輪になって、宙に浮いている。

星々は上だけじゃなく、僕の周囲に広がり、その眺めに何だか不思議な孤独感を感じた。

半端な場所、途中の場所、曖昧な場所。音ひとつなく、上下の感覚さえ薄れるその場所は余り長居すべき場所ではないように感じられ、そのせいか、時折浮かんでいる無骨な屑星もどこか寂しげに見える。僕はそれらを尻目に先を急ぐ。

やがて月が大きくなるにつれ、少しずつ段々と体が軽くなってきた、上る動きが楽になってきた。

そして、ふわふわと進む内、今度は月に引き込まれるような引力

を覚え始め、僕は注意深く体勢を逆に変える。もう上っているのではなく。月に降りているんだ。そのことに奇妙な感慨を覚える。

引き込まれる力が強まるにつれて、体はまた少しずつ軋みを上げるけど、それでも止まることなく、梯子を降りて、降りて、降りて、降りて。

降りるにつれて、月の風景は段々とはっきりしたものになっていく。

月面に広がる純白の草原、白波を立てる透明な月の海。静かで、穏やかな月の眺め。月世界へと気持ちははやるけれど、反比例するように梯子を降りる速度は遅く感じられて、まるで自分が一向に進んでいないようにさえ思えて、もどかしい。

けれど、そんな永遠にも感じられる下降にも終りが見え始める。

地面との距離は、プールの端と端ほどになり、横断歩道の向こうほどになり、そして小さめの街路樹くらいになった時、僕は思わず梯子から飛び降りた。

…ひゅるるるるる。

月の風が体を擦る。梯子が星が、視界を流れる。月へと舞い降りる僕を、頭上で地球が恨めしげに見下ろしている。

…ひゅるるるるるる。

月の砂浜が近づく。僕はその「さくり」とした感触を予想する。そしてその波打ち際に、豆だらけの手のひらを浸す心地よさと思う。

…もう、すぐそこだ。

८५०॥

ゴシヤリ。

…次の瞬間、僕は硬い地面に叩き付けられた。

衝撃であちこちの骨が砕けた。肉も骨から離れて、地面の方へへばり着いた。頭蓋骨も半ば砕けたのだろう。左半分が溶けたような違和感がある。：それに、顎は完全に砕け千切れて、外れている。

痛みと死が遅れてやって来るまでの少しの間、僕はまず自らに起こった変化を、薄ら寒さを覚えつつも不思議な冷静さで観察していた。

そして残った右目を開いてみれば、揺らぐ視界に、横倒しの大学の中庭が写る。

僕は、その正面にある校舎の屋上から飛び降りたのだ。

理由は、まあ、今更どうでもいい。

ぼやけ始めた意識の中で、後悔と、それになぜか清々しい達成感が水と油のように混ざることなく渦巻いている。

…不意に誰かが悲鳴を上げた。誰かが立ち去る気配がした。

意識が遠退く。難儀に思いながら僕は目を閉じようとして、ふと、もう一度だけ瞼を薄く開く。

近過ぎて気付かなかったけど、直ぐ目の前に何かある。

焦点を合わせてみると、

目の前で、潰れた左目が僕を見ていた。

：なぜか微笑みそうになりながら、僕は改めてゆっくりと目を閉じる。

そっか…。

そう…。

僕は、梯子を上って…。

：

靴を脱ぎ出した素足に砂浜の感触が心地いい。僕は打ち際に豆だらけ手のひらを浸す。

いつの間にやら見知らぬ鳥が、梯子に止まり鳴いている。

月世界へようこそ、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798z/>

月の糸

2011年12月2日23時46分発行